

学校教育高度化センター後援事業

Christine Lee客員准教授活動報告

報告者 秋田 喜代美 (教育学研究科 教授)

実施日2011年12月5日、19日

於 教育学部409

1. はじめに

2000年以後、アメリカを皮切りに世界各地で日本の授業研究に学び、授業研究を中核とした学校改革に取り組む国が増えている。世界授業研究会加盟国は24か国、JICAの授業研究プロジェクトに20か国、UNESCOの授業研究セミナーに14か国、APECの授業研究に17か国の国が参加するようになってきている。その先導の契機をシンガポールにおいてリードしてきたのが、クリスチャン・リー准教授である。リー准教授は、2004年10月から12月に来日して本センター客員准教授として滞在された折に日本での授業研究を学び、そこからシンガポールでの授業研究導入は始まり現在ではシンガポール全土の学校で授業研究に取り組んでいる。今回の講演会では、シンガポールでの教育改革全般と授業研究の取り組みについて、3回連続でお話をいただいたが、その中でも特にシンガポールでの授業研究の取り組みに焦点を絞り本稿の中では講演の内容をまとめさせていただく。

2. シンガポールにおける授業研究の発展

シンガポールでは、2011年に2010年予算比12.8%増で教育分野へ公費が投入される。その多くが教員の専門性開発につぎ込まれることになっている。教師教育への高投資こそが国の教育の質の向上を導くという方向が目指されている。シンガポールでは初等中等教育あわせて学校数は364、およそ31000人の教師の79%が学卒以上である。そして学校では80%が文部省指定内容、およそ20%が当該学校を基盤としたスクールベースのカリキュラムである。

シンガポールでは2004年からシンガポール国立教育研究所の教員が支援して授業研究(レッスンスタディ)が始まった、2004年にはモデル校1校であったのが2012年度には162校にまで増加予定である。これは2011年に学校に向けて実施した授業研究に関する調査の回答にもとづくものである。

2009年にシンガポール文部省の年間事業計画に授業研究が専門家による学びの共同体としての学校づくりへの道として引用され、それによって授業研究のトレーニングへの要求はさらに高まっている。教育省大臣のスピーチ等でもそれが紹介され導入のためのワークショップが行われるようになってきている。そこでは学校教師のための導入のワークショップ、学校長やリーダー教師への18時間コースのセミナーの開催、また教育課程実施研修のうちの1.5時間も授業研究に宛てられている。また校長会と国立教育政策研究所の合同開催で600人のリーダー教師たちが授業研究シンポジウムに参加している。2011年には数多くの授業研究グループが生れてきている。

3. 授業研究パイロット研究2006-2007の成果

2006年から2007年の授業研究のパイロットプロジェクトの主な結果としては次のようなものであった。大半の教師は、各教科の指導や学習の向上の過程の一つとしてのレッスンスタディ(授業研究)にはとても満足しているが、学校の中で同時に要求される様々な要求に対処しつつ両立させていくことの困難も感じている。特に相互の授業を参観しあうことが自信や信頼を生むと感じており、教師のチームで選択した教材内容について指導を

行うための自信を得ることにつながっている。授業研究チームが新任教師の面タリングの役割を担っているということができる。

実施当初には研究授業前の指導段階で指導法に焦点を当てた内容が会話の約半数を占めていたのに対して、翌年の段階では指導法において生徒の学習のあり方に言及した発言が、指導法のみ発言をはるかに超えるように変化していった。そして計画段階において、授業研究で何を問おうとしているのかという研究のトピックを議論できる方向を意識することなく研究授業でとりあげる内容の話題を決めることが多く、一つの授業の中に数多くの内容を詰め込むことで過剰な計画となっていた。また研究授業での観察のために小集団での研究を含むようになっていた。ただし単元の中に研究授業を位置づけるのではなく1時間の授業での学習でいかに改善するかを考えたい。そして生徒側が何を学んだかという量的データを収集することに関心が払われた。

また研究授業の観察段階においても何を観察し、どのように記録を取るかは教師たちの間では不確かであり、学ぶ生徒よりも授業者を観察する傾向がみられた。また観察の補助ツールとしてカメラやビデオカメラを使用することはなく、時には生徒のグループ学習過程を邪魔するようなことも見られた。

しかし授業研究の肯定的な成果が教師間により強い同僚性をもたらし、初任教師にとってメンタリング機能を果たし、学校内、学校間、国内、国際的プラットフォームを立ち上げることができる。そして教科内容知識をより深め教師自身のカリキュラムの再デザイン能力を向上されることができる。この教師の学習と生徒の学習の証拠データを集めることがさらに必要となされている。

また研究授業後の検討会における議論では教師たちは計画段階にたちあっていないとなかなか時間的についていけず具体的な観察記録や事例にもとづき省察を行うことはなく、生徒の学習を議論

に使用することはできなかった。そして教師側の指導へのコメントになりビデオを使用したり、その過程での材料や道具、記録等の人工物を使用することはできていない状況に会った。

シンガポールの授業研究はまだ開発の初期段階にあり2004年に開始したばかりである。学校文化と教師の精神を変えて栄くするにはまだ時間がかかろう。そして授業研究の質の向上のためにはより多くの研究を行っていくことが必要にされている。